

介護職員のための喀痰吸引等研修 実地研修講師の依頼について

指導看護師 様

株式会社ベストケア・パートナーズ
介護キャリアアカデミー
喀痰吸引 2 号・3 号研修機関登録番号 2710066
〒558-0011 大阪市住吉区苅田 9-14-20 ヤヨイビル 206 号
E-mail contact@kc-academy.jp
Fax06-6606-8731・喀痰吸引担当 檜・秦

平素は障がい者福祉及び高齢者福祉の増進に寄与されていることと存じます。

さて、このたび「介護職員のための喀痰吸引等研修（特定の者対象）」の受講者様より、実地研修講師の依頼確認がございました。

書面にて大変恐縮ではございますが、実地研修講師の依頼をさせていただきますと共に、手順等についてのご連絡をさせていただきます。

尚、実地研修の指導報酬については、受講者様（又は介護事業所等）と指導講師の方との間で直接取り決めをお願いします。介護キャリアアカデミーでは関与できませんのでご了承ください。

<送付書類内訳>

- ・実地研修講師の依頼について（本紙）
- ・喀痰吸引等研修（3号研修）講師資格申立書
→未提出の看護師様が実地研修評価をされる際は、指導看護師様全員分ご記入ください。
- ・現場演習・実地研修評価判定基準表
- ・評価票
- ・喀痰吸引等業務（特定行為業務）実地研修ヒヤリハット・アクシデント報告書

大阪府の指導により、現場演習評価記録が必須となりました。

A～Cの様式を改善しましたので、今後はこちらを使って下さい。

- ・実地研修評価票 兼 現場演習評価表（チェックリスト(A)）
- ・実地研修報告書（B）
- ・喀痰吸引等研修 実地研修 実施機関承諾書(C)

(※介護キャリアアカデミー宛てに(A)(B)(C)すべてご返送下さい)

**報告書及び評価票は、
人数分コピーして
ご記入下さい。**

※下記の書類について、受講者様より受け取り頂き必ずご確認ください。

- ・主治医指示書
- ・研修実施同意書
- ・実地研修確認書及び看護師指導予定表

特に提示等する必要はありませんが、ご利用者や、ご家族様、その他関係者の方から提示を求められるケースもございます。

< 実地研修の手順について >

1. 研修実施日の決定

受講者様・利用者様・指導看護師様の三者で実地研修の実施日時を決定してください。

※別紙 C、実地研修 実施機関承諾書の『研修受講者責任者名』を実地研修を行う事業所及び施設の方にご記入頂いて下さい。

2. 実地研修

①実地研修開始前に、現場演習（行為・手順を確認する現場での練習）を行ってください。(A)

※すべての項目が『A』になるまで一連の流れを確認してください。

②上記①の修了後、実地研修の指導をお願い致します。

③現場演習、実地研修は、別添評価票とチェックリスト(A)に沿って評価を行ってください。

※評価の判定基準に関しては、別添評価判定基準表を参照として下さい。

※経管栄養については、利用者様の状態により、滴下、半固形のいずれかを選択し研修を行ってください。(必要があればいずれも研修を行ってください。)

④所定の実地研修評価表のすべての項目について、指導看護師様が

「ア・手順通りに実施できる」と認めた場合に、実地研修が修了したものと認めます。

大阪府の指導では、「指導看護師の評価は、問題ないと判断されるまで実施する必要があり、連続2回全項目が「A」となるまで実施する事」となっています。従いまして、1回で全項目がAの評価になる場合も、2回以上実施してください。

⑤上記①～④の修了後、実地研修報告書の記入を、受講生ごとにお願ひします。

< 研修終了後 >

書類の送付

以下 A～C の書類を介護キャリアアカデミーまでお送り下さい。

※メールにて添付(PDF) contact@kc-academy.jp、



又は FAX にて送付下さい。

(A) 実地研修評価票 兼 現場演習評価表

(B) 実地研修報告書

(C) 喀痰吸引等研修 実地研修 実施機関承諾書

もし、受講者様経由で「講師資格申立書」をご提出されていない場合は、併せてご返送願ひします。念のため、用紙を同封いたします。

※厚生労働省作成の、研修動画をご覧になる場合は、下記よりご覧ください。

https://www.kc-academy.jp/kakutan_douga

パスワードは、douga5678 です。

その他、実地研修を行うにあたりご不明な点がございましたら、介護キャリアアカデミーまでお問い合わせください。

以上、よろしくお願ひ致します

指導看護師様へ

《喀痰吸引等登録研修(3号研修)講師資格申立書について》

大阪府の指導で実地研修を行う前に当「喀痰吸引等登録研修(3号研修)講師資格申立書」をご提出いただく事になりました。

当「申立」をしていただく為には下記2点が必要になります。

- ① 厚生労働省作成の介護職員等によるたんの吸引等(特定の者対象)の研修資料を閲覧していただく事。
- 且つ
- ② 以前厚生労働省から配信されておりました動画を見ていただく事が必要となります。

①の厚生労働省の資料は、下記の三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社のホームページからご覧いただけます。

https://www.murc.jp/sp/1509/houkatsu/houkatsu_07.html

②の動画につきましては現在厚生労働省からの配信が終了しておりますのでご覧になる場合は下記より閲覧ください。

https://www.kc-academy.jp/kakutan_douga

パスワードは douga5678 です

※医療的ケア教員講習会を受講済みの看護師様は研修資料及び動画の閲覧は必要ございません。

以上よろしくお願ひ申し上げます。

株式会社ベストケア・パートナーズ
介護キャリアアカデミー

喀痰吸引等登録研修（3号研修）講師資格申立書

大阪府知事 様

私 _____ は、「介護職員等によるたんの吸引等の実施のための指導者養成事業（特定の者対象）について」（平成23年9月14日障発0914第2号厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部長）に定める指導者養成研修事業を修了した者に相当する知識及び技能を厚生労働省が提示する介護職員等によるたんの吸引等（特定の者対象）の研修資料及び動画により習得していることを申し立てます。

令和 年 月 日

氏名 _____ 印

現場演習・実地研修評価判定基準表

(1)現場演習の評価判定基準

- ・ 現場演習(行為の確認)を行った各研修受講者毎、かつ、各評価項目毎について、以下のア～ウの3段階で演習指導講師が評価してください。

ア	評価項目について手順通りに実施できている。
イ	評価項目について手順を抜かしたり、間違えたりした。
ウ	評価項目を抜かした。(手順通りに実施できなかった。)

(2)実地研修の評価判定基準

- ・ 実地研修を行った各研修受講者毎、かつ、各評価項目毎について以下のア～ウの3段階で実地研修指導講師が評価してください。

ア	1人で実施できる。 評価項目について手順通りに実施できている。
イ	1人で実施できる。 評価項目について手順を抜かしたり、間違えたりした。 実施後に指導した。
ウ	1人で実施できる。 評価項目について手順を抜かしたり、間違えたりした。 その場では見過ごせないレベルであり、その場で指導した。
エ	1人での実施を任せられるレベルにはない。

評価票：喀痰吸引 口腔内吸引(通常手順)

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	必要性のある時だけ行っているか。
	5 吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	効果的にたんを吸引できる体位か。
	6 口の周囲、口腔内を観察する。	唾液の貯留、出血、腫れ、乾燥などのチェックをしたか。
	7 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	利用者の体に接触した後、吸引前の手洗いを行っているか。
	8 必要に応じ、きれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	手洗い後、決められた吸引カテーテル保持方法を守っているか。
	9 吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。 吸引カテーテルの先端をあちこちにぶつけていないか。
	10 吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	衛生的に操作できているか。
	11 (薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。
	12 決められた吸引圧になっていることを確認する。	吸引圧は20キロパスカル以下に設定する。
	13 吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	よく水を切ったか。
	14 「吸引しますよ～」と声をかける。	本人に合図を送り、心の準備をしてもらっているか。
	15 吸引カテーテルを口腔内に入れ、両頬の内側、舌の上下周囲を吸引する。	静かに挿入し、口腔内の分泌物を吸引できたか。 あまり奥まで挿入していないか。
	16 一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	外側に分泌物がついた吸引カテーテルをそのまま洗浄水(水道水等)に入れて水を汚染していないか。
	17 (薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	洗浄水、消毒液を吸いすぎしていないか。 吸引カテーテル内に分泌物が残っていないか。
	18 吸引器のスイッチを切る。	吸引器の機械音は、吸引が終わったらできるだけ早く消す。
	19 吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	
	20 手袋をはずす(手袋着用の場合) またはセッシをもとに戻し、手洗いをする。	
	21 利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	本人の意志を確認しているか。たんがとれ切れていない場合はもう一回繰り返すかを聞いているか。
	22 利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	苦痛を最小限に、吸引できたか。利用者の状態観察を行っているか。 経鼻胃管使用者では、吸引後、経鼻胃管が口腔内に出てきていないかを確認。
	23 体位を整える	楽な体位であるか利用者に確認したか。
24 吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	吸引したたんの量・色・性状を見て、たんに異常はないか確認しているか。(異常があった場合、家族や看護師、医師に報告したか。感染の早期発見につながる。)	
STEP6： 片付け	25 吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	手早く片づけているか。 吸引びんの汚物は適宜捨てる。
	26 洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	洗浄の水や消毒液は継ぎ足さず、セットごと取り換えているか。
STEP7： 記録、報告	27 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。 (ヒヤリハットは業務の後に記録する。)

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点(良好な体位やOKサイン等)について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

評価票：喀痰吸引 口腔内吸引(人工呼吸器装着者：口鼻マスクによる非侵襲的人工呼吸療法)

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	必要性のある時だけ行っているか。
	5 吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	効果的にたんを吸引できる体位か。
	6 口の周囲、口腔内を観察する。	唾液の貯留、出血、腫れ、乾燥などのチェックをしたか。
	7 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	利用者の体に接触した後、吸引前の手洗いを行っているか。
	8 必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセツンを持つ。	手洗い後、決められた吸引カテーテル保持方法を守っているか。
	9 吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。吸引カテーテルの先端をあちこちにぶつけていないか。
	10 吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	衛生的に操作できているか。
	11 (薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。
	12 決められた吸引圧になっていることを確認する。	吸引圧は20キロパスカル以下に設定する。
	13 吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	よく水を切ったか。
	14 「吸引しますよ～」と声をかける。	本人に合図を送り、心の準備をしてもらっているか。
	15 口鼻マスクをはずす。	個人差があり、順番が前後することがある。
	16 吸引カテーテルを口腔内に入れ、両頬の内側、舌の上下周囲を吸引する。	静かに挿入し、口腔内の分泌物を吸引できたか。あまり奥まで挿入していないか。
	17 口鼻マスクを適切にもとの位置にもどす。	個人差があり、順番が前後することがある。
	18 一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	外側に分泌物がついた吸引カテーテルをそのまま洗浄水(水道水等)に入れて水を汚染していないか。
	19 (薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	洗浄水、消毒液を吸いすぎていないか。吸引カテーテル内に分泌物が残っていないか。
	20 吸引器のスイッチを切る。	吸引器の機械音は、吸引が終わったらできるだけ早く消す。
21 吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。		
22 手袋をはずす(手袋着用の場合)またはセツンをもとに戻し、手洗いをする。		
23 利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	本人の意志を確認しているか。たんがとれ切れていない場合はもう一回繰り返すかを聞いているか。	
24 利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	苦痛を最小限に、吸引できたか。利用者の状態観察を行っているか。経鼻胃管使用者では、吸引後、経鼻胃管が口腔内に出てきていないかを確認。	
25 人工呼吸器が正常に作動していること、口鼻マスクの装着がいつも通りであることを確認する。	人工呼吸器の作動状態、マスクの装着状態を確認しているか。	
26 体位を整える	楽な体位であるか利用者に確認したか。	
27 吸引した物の量、性状等について、ふり返り確認する	吸引したたんの量・色・性状を見て、たんに異常はないか確認しているか。(異常があった場合、家族や看護師、医師に報告したか。感染の早期発見につながる。)	
STEP6： 片付け	28 吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	手早く片づけているか。吸引びんの汚物は適宜捨てる。
	29 洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	洗浄の水や消毒液は継ぎ足さず、セットごと取り換えているか。
STEP7： 記録、報告	30 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。(ヒヤリハットは業務の後に記録する。)

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点(良好な体位やOKサイン等)について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

評価票：喀痰吸引 鼻腔内吸引(通常手順)

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	必要性のある時だけ行っているか。
	5 吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	効果的にたんを吸引できる体位か。
	6 鼻の周囲、鼻腔内を観察する。	鼻汁の貯留、出血、腫れ、乾燥などのチェックをしたか。
	7 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	利用者の体に接触した後、吸引前の手洗いを行っているか。
	8 必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッションを持つ。	手洗い後、決められた吸引カテーテル保持方法を守っているか。
	9 吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。 吸引カテーテルの先端をあちこちにぶつけていないか。
	10 吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	衛生的に操作できているか。
	11 (薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。
	12 決められた吸引圧になっていることを確認する。	吸引圧は20キロボスカ以下に設定する。
	13 吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	よく水を切ったか。
	14 「吸引しますよ～」と声をかける。	本人に合図を送り、心の準備をしてもらっているか。
	15 吸引カテーテルを陰圧をかけない状態で鼻腔内の奥に入れる。	奥に挿入するまで、吸引カテーテルに陰圧はかけていないか。 適切な角度の調整で吸引カテーテルを奥まで挿入できているか。
	16 (吸引カテーテルを手で操作する場合) こよりを燃えるように左右に回転し、ゆっくり引き抜きながら吸引する。	(吸引カテーテルを手で操作する場合) 吸引カテーテルを左右に回転させながら引き抜いているか
	17 一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	外側に分泌物がついた吸引カテーテルをそのまま洗浄水(水道水等)に入れて水を汚染していないか。
	18 (薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	洗浄水、消毒液を吸いすぎしていないか。 吸引カテーテル内に分泌物が残っていないか。
	19 吸引器のスイッチを切る。	吸引器の機械音は、吸引が終わったらできるだけ早く消す。
	20 吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	
	21 手袋をはずす(手袋着用の場合) またはセッションをもとに戻し、手洗いをする。	
	22 利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	本人の意志を確認しているか。たんがとれ切れていない場合はもう一回繰り返すかを聞いているか。
23 利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	苦痛を最小限に、吸引できたか。利用者の状態観察を行っているか。 経鼻胃管使用者では、吸引後、経鼻胃管が口腔内に出てきていないかを確認。	
24 体位を整える	楽な体位であるか利用者に確認したか。	
25 吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	吸引したたんの量・色・性状を見て、たんに異常はないか確認しているか。(異常があった場合、家族や看護師、医師に報告したか。感染の早期発見につながる。)	
STEP6： 片付け	26 吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	手早く片づけているか。 吸引びんの汚物は適宜捨てる。
	27 洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	洗浄用の水や消毒液は継ぎ足さず、セットごと取り換えているか。
STEP7： 記録、報告	28 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。 (ヒヤリハットは業務の後に記録する。)

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点(良好な体位やOKサイン等)について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

評価票：喀痰吸引 鼻腔内吸引(人工呼吸器装着者：口鼻マスクまたは鼻マスクによる非侵襲的人工呼吸療法)

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまででは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	必要性のある時だけ行っているか。
	5 吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	効果的にたんを吸引できる体位か。
	6 鼻の周囲、鼻腔内を観察する。	鼻汁の貯留、出血、腫れ、乾燥などのチェックをしたか。
	7 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	利用者の体に接触した後、吸引前の手洗いを行っているか。
	8 必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	手洗い後、決められた吸引カテーテル保持方法を守っているか。
	9 吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。 吸引カテーテルの先端をあらかじめぶつけていないか。
	10 吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	衛生的に操作できているか。
	11 (薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。
	12 決められた吸引圧になっていることを確認する。	吸引圧は20キロボスカ以下に設定する。
	13 吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	よく水を切ったか。
	14 「吸引しますよ～」と声をかける。	本人に合図を送り、心の準備をしてもらっているか。
	15 口鼻マスクまたは鼻マスクをはずす。	個人差があり、順番が前後することがある。
	16 吸引カテーテルを陰圧をかけない状態で鼻腔内の奥に入れる。	奥に挿入するまで、吸引カテーテルに陰圧をかけていないか。 適切な角度の調整で吸引カテーテルを奥まで挿入できているか。
	17 (吸引カテーテルを手で操作する場合) こよりを熱るように左右に回転し、ゆっくり引き抜きながら吸引する。	(吸引カテーテルを手で操作する場合) 吸引カテーテルを左右に回転させながら引き抜いているか
	18 一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	外側に分泌物がついた吸引カテーテルをそのまま洗浄水(水道水等)に入れて水を汚染していないか。
	19 口鼻マスクまたは鼻マスクを適切にもとの位置にもどす。	個人差があり、順番が前後することがある。
	20 (薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	洗浄水、消毒液を吸いすぎていないか。 吸引カテーテル内に分泌物が残っていないか。
	21 保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	
	22 吸引器のスイッチを切る。	吸引器の機械音は、吸引が終わったらできるだけ早く消す。
	23 吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	
	24 手袋をはずす(手袋着用の場合) またはセッシをもとに戻し、手洗いをする。	
	25 利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	本人の意志を確認しているか。たんがとれ切れていない場合はもう一回繰り返すかを聞いているか。 苦痛を最小限に、吸引できたか。利用者の状態観察を行っているか。 経鼻胃管使用者では、吸引後、経鼻胃管が口腔内に出てきていないかを確認。
	26 利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	
	27 人工呼吸器が正常に作動していること、口鼻マスクまたは鼻マスクの装着がいつも通りであることを確認する。	人工呼吸器の作動状態、マスクの装着状態を確認しているか。
	28 体位を整える	楽な体位であるか利用者を確認したか。
29 吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	吸引したたんの量・色・性状を見て、たんには異常はないか確認しているか。(異常があった場合、家族や看護師、医師に報告したか。感染の早期発見につながる。)	
STEP6： 片付け	30 吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	手早く片付けているか。 吸引びんの汚物は適宜捨てる。
	31 洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	洗浄用の水や消毒液は継ぎ足さず、セットごと取り換えているか。
STEP7： 記録、報告	32 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。(ヒヤリハットは業務の後に記録する。)

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点(良好な体位やOKサイン等)について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

評価票：喀痰吸引 気管カニューレ内部吸引(通常手順)

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	4 気管カニューレに人工鼻が付いている場合、はずしておく。	
STEP5： 実施	5 利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	必要性のある時だけ行っているか。
	6 吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	効果的にたんを吸引できる体位か。
	7 気管カニューレの周囲、固定状態及びたんの貯留を示す呼吸音の有無を観察する。	気管カニューレ周囲の状態(たんの吹き出し、皮膚の発等)、固定のゆるみ、たんの貯留を示す呼吸音の有無などのチェックをしたか。
	8 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	利用者の体に接触した後、吸引前の手洗いを行っているか。
	9 必要に応じきれいな手袋をする。場合によってはセツシを持つ。	手洗い後、決められた吸引カテーテル保持方法を守っているか。
	10 吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。吸引カテーテルの先端をあちこちにぶつけていないか。
	11 吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	衛生的に操作できているか。
	12 吸引器のスイッチを入れる。	先端から約10cmのところを手袋をした手(またはセツシ)で持つ。
	13 (薬液浸漬法の場合) 水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。吸引カテーテル先端の水を良く切る。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。
	14 決められた吸引圧になっていることを確認する。	吸引圧は20キロパスカル以下に設定する。
	15 吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	よく水を切ったか。
	16 「吸引しますよ～」と声をかける。	本人に合図を送り、心の準備をしてもらっているか。
	17 手袋をつけた手(またはセツシ)で吸引カテーテルを気管カニューレ内(約10cm)に入れる。	手(またはセツシ)での持ち方は正しいか。どの時期で陰圧をかけるか、あらかじめ決めておく。吸引カテーテルは気管カニューレの先端を越えていないか。
	18 カテーテルを左右に回し、ゆっくり引き抜きながら、15秒以内で吸引をする。	吸引中、直後の患者の呼吸状態・顔色に気をつける。異常があった場合、家族や看護師に即座に報告したか。陰圧をかけて吸引できているか。吸引の時間は適切か。
	19 一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	外側に分泌物がついた吸引カテーテルをそのまま洗浄水(滅菌蒸留水)に入れて水を汚染していないか。
	20 (薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	洗浄水、消毒液を吸いすぎていないか。吸引カテーテル内に分泌物が残っていないか。
	21 吸引器のスイッチを切る。	吸引器の機械音は、吸引が終わったらできるだけ早く消す。
	22 吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	
	23 (サイドチューブ付き気管カニューレの場合) 吸引器の接続管とサイドチューブをつなぎ、吸引する。	
	24 手袋をはずす(手袋着用の場合)またはセツシをもとに戻し、手洗いをする。	
25 利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	本人の意志を確認しているか。たんがとれ切れていない場合はもう一回繰り返すかを聞いているか。	
26 利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	苦痛を最小限に、吸引できたか。利用者の状態観察を行えているか。	
27 体位を整える	楽な体位であるか利用者に確認したか。	
28 吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	吸引したたんの量・色・性状を見て、たんに異常はないか確認しているか。(異常があった場合、家族や看護師、医師に報告したか。感染の早期発見につながる。)	
STEP6： 片付け	29 吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	手早く片づけているか。吸引びんの汚物は適宜捨てる。
	30 洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	洗浄用の水や消毒液は継ぎ足さず、セットごと取り換えているか。
STEP7： 記録、報告	31 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。(ヒヤリハットは業務の後に記録する。)

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点(良好な体位やOKサイン等)について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。
- ※ サイドチューブ付き気管カニューレの場合、気管カニューレ内吸引の前でサイドチューブからも吸引することが、肺炎予防の上で望ましい。

評価票：喀痰吸引 気管カニューレ内部吸引(人工呼吸器装着者：侵襲的人工呼吸療法)

実施手順	評価項目	評価の視点	
STEP4： 準備	1 訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	外から細菌を持ち込まない。	
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。		
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。		
	4 気管カニューレに固定ヒモが結んである場合はほどいておき、少しコネクタをゆるめておいても良い。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。	
STEP5： 実施	5 利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	必要性のある時だけ行っているか。	
	6 吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	効果的にたんを吸引できる体位か。	
	7 気管カニューレの周囲、固定状態およびたんの貯留を示す呼吸音の有無を観察する。	気管カニューレ周囲の状態（たんの吹き出し、皮膚の発等）、固定のゆるみ、たんの貯留を示す呼吸音の有無などのチェックをしたか。	
	8 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	利用者の体に接触した後、吸引前の手洗いを行っているか。	
	9 必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	手洗い後、決められた吸引カテーテル保持方法を守っているか。	
	10 吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。	
	11 吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげ	吸引カテーテルの先端をあちこちにぶつけていないか。	
	12 吸引器のスイッチを入れる。	衛生的に操作できているか。	
	13 (薬液浸漬法の場合) 吸引カテーテルの周囲、内腔の消毒液を取り除くため、専用の水を吸引し、周囲も洗う。吸引カテーテル先端の水を良く切る。	先端から約10cmのところを手袋をした手（またはセッシ）で持つ。	
	14 決められた吸引圧になっていることを確認する。	衛生的に、器具の取扱いができていないか。	
	15 吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	吸引圧は20キロパスカル以下に設定する。	
	16 「吸引しますよ～」と声をかける。	よく水を切ったか。	
	17 人工呼吸器から空気が送り込まれ、胸が盛り上がるのを確認後、フレキシブルチューブのコネクタを気管カニューレからはずし、フレキシブルチューブをきれいなタオル等の上に置く。	本人に合図を送り、心の準備をしてもらっているか。	
	18 手袋をつけた手（またはセッシ）で吸引カテーテルを気管カニューレ内（約10cm）に入れる。	呼吸器から肺に空気が送り込まれたことを確認後に、片手でフレキシブルチューブ（コネクタ）を、そとはずせているか。	
	19 カテーテルを左右に回し、ゆっくり引き抜きながら、15秒以内で吸引をする。	気管カニューレをひっぱって痛みを与えていないか。	
	20 吸引を終了したら、すぐにコネクタを気管カニューレに接続する。	はずしたフレックスチューブをきれいなガーゼかタオルの上に置いていないか。	
	21 一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	水滴が気管カニューレ内に落とし込んでいないか。	
	22 (薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	手（またはセッシ）での持ち方は正しいか。	
	23 吸引器のスイッチを切る。（吸引終了）	どの時期で陰圧をかけるか、あらかじめ決めておく。	
	24 吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。（薬液浸漬法の場合）消毒液の入った保存容器にもどす。	吸引カテーテルは気管カニューレの先端を越えていないか。	
	25 手袋をはずす（手袋着用の場合）またはセッシをもとに戻す。手洗いをする。	吸引中、直後の患者の呼吸状態・顔色に気をつける。異常があった場合、家族や看護師に即座に報告したか。	
	26 利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	陰圧をかけて吸引できているか。	
	27 利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	吸引の時間は適切か。	
	28 人工呼吸器が正常に作動していること、気道内圧、酸素飽和度等をチェックする。	フレキシブルチューブ内に水滴が付いている場合、水滴を払った後に、コネクタを気管カニューレに接続しているか。	
	29 体位を整える	外側に分泌物がついた吸引カテーテルをそのまま洗浄水（滅菌蒸留水）に入れて水を汚染していないか。	
	30 吸引した物の量、性状等について、ふり返り確認する。	洗浄水、消毒液を吸いすぎていないか。	
	STEP6： 片付け	31 吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	吸引カテーテル内に分泌物が残っていないか。
		32 洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	吸引器の機械音は、吸引が終わったらできるだけ早く消す。
	STEP7： 記録、報告	33 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	吸引器のスイッチを切る。

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点（良好な体位やOKサイン等）について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。
- ※ サイドチューブ付き気管カニューレの場合、気管カニューレ内吸引の前後でサイドチューブからも吸引することが、肺炎予防の上で望ましい。

評価票：胃ろう又は腸ろうによる経管栄養(滴下)

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から注入の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	本人の同意はあるか。意思を尊重しているか。声をかけているか。
	5 必要物品、栄養剤を用意する。	必要な物品が揃っているか。衛生的に保管されていたか。(食中毒予防も) 栄養剤の量や温度に気を付けているか。(利用者の好みの温度とする。栄養剤は冷蔵保存しないことが原則である。)
	6 体位を調整する。	安全にかつ効果的に注入できる体位か。(頭部を30～60度アップし、膝を軽度屈曲。関節の拘縮や体型にあわせ、胃を圧迫しない体位等) 頭部を一気に挙上していないか(一時的に脳貧血などを起こす可能性がある)。
	7 注入内容を確認し、クレンメを止めてから栄養剤を注入容器に入れ、注入容器を高いところにかける。滴下筒に半分位満たし滴下が確認できるようにする。	クレンメは閉めているか。
	8 クレンメをゆるめ、栄養剤を経管栄養セットのラインの先端まで流し、空気を抜く。	経管栄養セットのライン内の空気を、胃の中に注入しないため。
	9 胃ろうチューブの破損や抜けがないか、固定の位置を観察する。	破損、抜けがないか。胃ろうから出ているチューブの長さに注意しているか。
	10 胃ろうに経管栄養セットをつなぐ。	しっかりつなげ、途中で接続が抜けるようなことはないか。つないだのが胃ろうチューブであることを確認したか。利用者の胃から約50 cm程度の高さに栄養バッグがあるか。
	11 クレンメをゆっくり緩めて滴下する。	滴下スピードは100ミリリットル～200ミリリットル/時を目安に、本人にあった適切なスピードが良い。
	12 異常がないか、確認する。	胃ろう周辺やチューブの接続部からか漏れていないか。利用者の表情は苦しそうではないか。下痢、嘔吐、頻脈、発汗、顔面紅潮、めまいなどはないか。意識の変化はないか。息切れはないか。始めはゆっくり滴下し、顔色や表情の変化がないかどうか確認し(場合によってはパルスオキシメーターも参考に)適切なスピードを保ったか。
	13 滴下が終了したらクレンメを閉じ、経管栄養セットのラインをはずし、カテーテルチップ型シリンジで胃ろうチューブに白湯を流す。	チューブ先端の詰まりを 방지、細菌が繁殖しないように、よく洗ったか。細菌増殖予防目的で、食酢を10倍程度希釈し、カテーテルチップ型シリンジで注入する場合もある。
	14 体位を整える	終了後しばらくは上体を挙上する。楽な体位であるか利用者に確認したか。
STEP6： 片付け	15 後片付けを行う。	使用した器具(栄養チューブやシリンジ)を洗浄したか。割ったり壊したりしないように注意したか。食器と同じ取り扱いでよく洗浄したか。
STEP7： 記録、報告	16 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。(ヒヤリハットは業務の後に記録する。)

※ 利用者による評価ポイント(評価を行うに当たって利用者の意見の確認が特に必要な点)

- ・調理の仕方は適切か。流してみてもチューブにつまらないか。
- ・注入の早さ、温度は利用者の好みであるか。
- ・注入中の体位が楽な姿勢か

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点(良好な体位やOKサイン等)について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

評価票：胃ろうによる経管栄養（半固形タイプ）

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から注入の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	本人の同意はあるか。意思を尊重しているか。声をかけているか。
	5 必要物品、栄養剤を用意する。	必要な物品が揃っているか。衛生的に保管されていたか。（食中毒予防も）栄養剤の量や温度に気を付けているか。（利用者の好みの温度とする。栄養剤は冷蔵保存しないことが原則である。）
	6 体位を調整する。	安全にかつ効果的に注入できる体位か。（頭部を30～60度アップし、膝を軽度屈曲。関節の拘縮や体型にあわせ、胃を圧迫しない体位等）頭部を一気に挙上していないか（一時的に脳貧血などを起こす可能性がある）。
	7 胃ろうチューブの破損や抜けがないか確認する。	破損、抜けがないか。胃ろうから出ているチューブの長さに注意しているか。
	8 胃ろうに半固形栄養剤のバッグなし、半固形栄養剤を吸ったカテーテルチップ型シリンジをつなぐ。	つないだのが胃ろうチューブであることを確認したか。圧をかけたとき、液がもれたり、シリンジが抜けたりすることがあるので、接続部位を把持しているか。（タオルなどで把持するとよい）
	9 半固形栄養剤のバッグなしカテーテルチップ型シリンジの内筒を適切な圧で押しながら注入する。	5分～15分程度で全量注入する（250ccから400ccくらい）本人にあった適切なスピードが良い。半固形の栄養バッグ（市販）は手で丸めこみ最後はそうきんを絞るように注入する（専用のスクイザーや加圧バッグで注入しても良い。）
	10 異常がないか、確認する。	胃ろう周辺やチューブの接続部位からか漏れていないか。利用者の表情は苦しそうではないか。下痢、嘔吐、異常な頻脈、異常な発汗、異常な顔面紅潮、めまいなどはないか。意識の変化はないか。息切れはないか。始めはゆっくり注入し、顔色や表情の変化がないかどうか確認し（場合によってはパルスオキシメーターも参考に）適切なスピードを保ったか。
	11 注入が終わったら、チューブ内洗浄程度の白湯あるいは10倍に希釈した食酢をシリンジで流す。	半固形栄養剤が液体になるほど加量に水分を注入していないか。チューブ先端の詰まりを防ぎ、細菌が繁殖しないように、圧をかけてフラッシュしたか。
12 体位を整える	終了後しばらくは上体を挙上する。楽な体位であるか利用者に確認したか。	
STEP6： 片付け	13 後片付けを行う。	使用した器具（栄養チューブやシリンジ）を洗浄したか。割ったり壊したりしないように注意したか。食器と同じ取り扱いでよく洗浄したか。楽な体位であるか利用者に確認したか。（半固形の場合は大きな角度のベッドアップは必要ではない）
STEP7： 記録、報告	14 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。（ヒヤリハットは業務の後に記録する。）

※ 利用者による評価ポイント（評価を行うに当たって利用者の意見の確認が特に必要な点）

- ・調理の仕方は適切か。流してみてもチューブにつまらないか。
- ・注入の早さ、温度は利用者の好みであるか。
- ・注入中の体位が楽な姿勢か

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点（良好な体位やOKサイン等）について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

評価票：経鼻経管栄養

実施手順	評価項目	評価の視点
STEP4： 準備	1 流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	外から細菌を持ち込まない。
	2 医師・訪問看護の指示を確認する。	ここまでは、ケアの前に済ませておく。
	3 利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	
STEP5： 実施	4 利用者本人から注入の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	本人の同意はあるか。意思を尊重しているか。声をかけているか。
	5 必要物品、栄養剤を用意する。	必要な物品が揃っているか。衛生的に保管されていたか。（食中毒予防も）栄養剤の量や温度に気を付けているか。（利用者の好みの温度とする。栄養剤は冷蔵保存しないことが原則である。）
	6 体位を調整する。	安全にかつ効果的に注入できる体位か。（頭部を30～60度アップし、膝を軽度屈曲。関節の拘縮や体型にあわせ、胃を圧迫しない体位等）頭部を一気に挙上していないか（一時的に脳貧血などを起こす可能性がある）。
	7 注入内容を確認し、クレンメを止めてから栄養剤を注入容器に入れ、注入容器を高いところにかける。滴下筒に半分位満たし滴下が確認できるようにする。	クレンメは閉めているか。
	8 クレンメをゆるめ、栄養剤を経管栄養セットのラインの先端まで流し、空気を抜く。	経管栄養セットのライン内の空気を、胃の中に注入しないため。
	9 チューブの破損や抜けがないか、固定の位置を確認する。口の中でチューブが巻いてないか確認する。	破損、抜けがないか。鼻から挿入されたチューブの鼻より外に出たチューブの長さに変わりがないか確認したか。口腔内で経鼻胃管がとぐろを巻いていないか。
	10 経鼻胃管に経管栄養セットをつなぐ。	しっかりつなげ、途中で接続が抜けるようなことはないか。つないだのが経管栄養のチューブであることを確認したか。利用者の胃から約50 cm程度の高さに栄養バッグがあるか。
	11 クレンメをゆっくり緩めて滴下する。	滴下スピードは100ミリリットル～200ミリリットル/時を目安に、本人にあった適切なスピードが良い。
	12 異常がないか、確認する。	利用者の表情は苦しそうではないか。下痢、嘔吐、頻脈、発汗、顔面紅潮、めまいなどはないか。意識の変化はないか。息切れはないか。始めはゆっくり滴下し、顔色や表情の変化がないかどうか確認し（場合によってはパルスオキシメーターも参考に）適切なスピードを保ったか。
	13 滴下が終了したらクレンメを閉じ、経管栄養セットのラインをはずし、カテーテルチップ型シリンジで胃ろうチューブに白湯を流す。	チューブ先端の詰まりを防ぎ、細菌が繁殖しないように、よく洗ったか。細菌増殖予防目的で、食酢を10倍程度希釈し、カテーテルチップ型シリンジで注入する場合もある。
14 体位を整える	終了後しばらくは上体を挙上する。楽な体位であるか利用者に確認したか。	
STEP6： 片付け	15 後片付けを行う。	使用した器具（栄養チューブやシリンジ）を洗浄したか。割ったり壊したりしないように注意したか。食器と同じ取り扱いでよく洗浄したか。楽な体位であるか利用者に確認したか。
STEP7： 記録、報告	16 評価票に記録する。ヒヤリハットがあれば報告する。	記録し、ヒヤリハットがあれば報告したか。（ヒヤリハットは業務の後に記録する。）

※ 利用者による評価ポイント（評価を行うに当たって利用者の意見の確認が特に必要な点）

- ・調理の仕方は適切か。流してみてもチューブにつまらないか。
- ・注入の早さ、温度は利用者の好みであるか。
- ・注入中の体位が楽な姿勢か

留意点

- ※ 特定の利用者における個別の留意点（良好な体位やOKサイン等）について、把握した上でケアを実施すること。
- ※ 実際に評価表を使用する際は、各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正して使用すること。

(別添様式5)

喀痰吸引等業務（特定行為業務） 実地研修ヒヤリハット・アクシデント報告書

報告者状況	事業所名称	
	介護職員氏名	
	管理責任者氏名	
被報告者状況	事業所名称	
	連携看護職員氏名	

発生日時	年 月 日 (曜日)	午前・午後	時 分頃
発生場所	<input type="checkbox"/> ベッド上 <input type="checkbox"/> 車椅子 <input type="checkbox"/> その他(具体的に)		
対象者	氏名 :	(男・女)	年齢 :
	当日の状況		

出来事の情報（1連の行為につき1枚）			
行為の種類	【喀痰吸引】 ①人工呼吸器の装着の有無 <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり ②部位 (<input type="checkbox"/> 口腔 <input type="checkbox"/> 鼻腔 <input type="checkbox"/> 気管カニューレ内) 【経管栄養】 (<input type="checkbox"/> 胃ろう <input type="checkbox"/> 腸ろう <input type="checkbox"/> 経鼻経管)		
第1発見者 (○は1つ)	<input type="checkbox"/> 記入者自身 <input type="checkbox"/> 記入者以外の介護職員 <input type="checkbox"/> 連携看護職員 <input type="checkbox"/> 連携看護職員以外の看護職員	<input type="checkbox"/> 医師 <input type="checkbox"/> 介護支援専門員	<input type="checkbox"/> 家族や訪問者 <input type="checkbox"/> その他 ()
出来事の発生状況	※誰が、何をを行っている際、何を、どのようにしたため、対象者はどうなったか。		
医師 への報告	<input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり		
連携看護職員 への報告	<input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり		
出来事への対応	※出来事が起きてから、誰が、どのように対応したか。		

救急救命処置の実施	<input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり（具体的な処置： _____）
出来事が発生した背景・要因	※なぜ、どのような背景や要因により、出来事が起きたか。
（当てはまる要因を全て）	【人的要因】 <input type="checkbox"/> 判断誤り <input type="checkbox"/> 知識誤り <input type="checkbox"/> 確認不十分 <input type="checkbox"/> 観察不十分 <input type="checkbox"/> 知識不足 <input type="checkbox"/> 未熟な技術 <input type="checkbox"/> 技術間違い <input type="checkbox"/> 寝不足 <input type="checkbox"/> 体調不良 <input type="checkbox"/> 慌てていた <input type="checkbox"/> 緊張していた <input type="checkbox"/> 思いこみ <input type="checkbox"/> 忘れた <input type="checkbox"/> その他（ _____ ） 【環境要因】 <input type="checkbox"/> 不十分な照明 <input type="checkbox"/> 業務の中断 <input type="checkbox"/> 緊急時 <input type="checkbox"/> その他（ _____ ） 【管理・システムの要因】 <input type="checkbox"/> 連携（コミュニケーション）の不備 <input type="checkbox"/> 医療材料・医療機器の不具合 <input type="checkbox"/> 多忙 <input type="checkbox"/> その他（ _____ ）
出来事の影響度分類（レベル0～5のうち一つ）	<input type="checkbox"/> 0 エラーや医薬品・医療用具の不具合が見られたが、対象者には実施されなかった <input type="checkbox"/> 1 対象者への実害はなかった（何らかの影響を与えた可能性は否定できない） <input type="checkbox"/> 2 処置や治療は行わなかった（対象者観察の強化、バイタルサインの軽度変化、安全確認のための検査などの必要性は生じた） <input type="checkbox"/> 3 a 簡単な処置や治療を要した（消毒、湿布、皮膚の縫合、鎮痛剤の投与など） <input type="checkbox"/> 3 b 濃厚な処置や治療を要した（バイタルサインの高度変化、人工呼吸器の装着、手術、入院日数の延長、外来患者の入院、骨折など） <input type="checkbox"/> 4 a 永続的な障害や後遺症が残ったが、有意な機能障害は伴わない <input type="checkbox"/> 4 b 永続的な障害や後遺症が残り、有意な機能障害の問題を伴う <input type="checkbox"/> 5 レベル4 bをこえる影響を与えた

介護職員 報告書記入日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

医師・連携看護職員の助言等	①医師又は看護職員が出来事への対応として実施した医療処置等について
	②介護職員へ行った助言・指導内容等について
	③その他（今回実施した行為で介護職員の対応として評価できる点など）

医師・連携看護職員 報告書記入日 _____ 年 _____ 月 _____ 日

現場演習・実地研修 評価表：喀痰吸引 口腔内吸引(通常手順)

研修 受講者氏名	※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。
対象者氏名	

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修			
	回数	月日	(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目
	時間		1月12日	/	/	/	/	/
			15:00~15:30					
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP5 実施	4	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	5	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	6	口の周囲、口腔内を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	7	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	8	必要に応じ、きれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	9	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	10	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	11	(薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの口腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	12	決められた吸引圧になっていることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	13	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	14	「吸引しますよ～」と声をかける。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	15	吸引カテーテルを口腔内に入れ、両頬の内側、舌の上下周囲を吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	16	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	17	(薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	18	吸引器のスイッチを切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	19	吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。 (薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	20	手袋をはずす(手袋着用の場合)またはセッシをもとに戻し、手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	21	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	22	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	23	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	24	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP6 結果確認 報告	25	吸引びんの廃液量が70~80%になる前に廃液を捨てる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	26	洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP7 記録 報告	27	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			27					
評価者(指導看護師)サイン			大阪					

*自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が「ア」になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順		評価項目		記入例	現場演習	実地研修				
		回数	月日			(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目	
		時間								
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。		ア・イ・ウ						
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。		ア・イ・ウ						
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。		ア・イ・ウ						
STEP5 実施	4	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。		ア・イ・ウ						
	5	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。		ア・イ・ウ						
	6	口の周囲、口腔内を観察する。		ア・イ・ウ						
	7	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。		ア・イ・ウ						
	8	必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセツシを持つ。		ア・イ・ウ						
	9	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。		ア・イ・ウ						
	10	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。		ア・イ・ウ						
	11	(薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。		ア・イ・ウ						
	12	決められた吸引圧になっていることを確認する。		ア・イ・ウ						
	13	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。		ア・イ・ウ						
	14	「吸引しますよ～」と声をかける。		ア・イ・ウ						
	15	口鼻マスクをはずす。		ア・イ・ウ						
	16	吸引カテーテルを口腔内に入れ、両頬の内側、舌の上下周囲を吸引する。		ア・イ・ウ						
	17	口鼻マスクを適切にもとの位置にもどす。		ア・イ・ウ						
	18	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。		ア・イ・ウ						
	19	(薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。		ア・イ・ウ						
	20	吸引器のスイッチを切る。		ア・イ・ウ						
	21	吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。 (薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。		ア・イ・ウ						
	22	手袋をはずす(手袋着用の場合) またはセツシをもとに戻し、手洗いをする。		ア・イ・ウ						
	23	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。		ア・イ・ウ						
24	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。		ア・イ・ウ							
25	人工呼吸器が正常に作動していること、口鼻マスクの装着がいつも通りであることを確認する。		ア・イ・ウ							
26	体位を整える		ア・イ・ウ							
27	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。		ア・イ・ウ							
STEP6 結果確認 報告	28	吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。		ア・イ・ウ						
	29	洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。		ア・イ・ウ						
STEP7 記録 報告	30	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。		ア・イ・ウ						
アの個数 計			30							
評価者(指導看護師)サイン			大阪							

*自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が「A」になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「A」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：喀痰吸引 鼻腔内吸引(通常手順)

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修			
	回数	月日	(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目
	時間		1月12日	/	/	/	/	/
			15:00~15:30					
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP5 実施	4	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	5	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	6	鼻の周囲、鼻腔内を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	7	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	8	必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	9	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	10	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	11	(薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内壁を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	12	決められた吸引圧になっていることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	13	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	14	「吸引しますよ～」と声をかける。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	15	吸引カテーテルを陰圧をかけない状態で鼻腔内の奥に入れる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	16	(吸引カテーテルを手で操作する場合) こよりを燃えるように左右に回転し、ゆっくり引き抜きながら吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	17	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	18	(薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	19	吸引器のスイッチを切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	20	吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。 (薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	21	手袋をはずす(手袋着用の場合) またはセッシをもとに戻し、手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	22	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	23	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	24	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	25	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	STEP6 結果確認 報告	26	吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
27		洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP7 記録 報告	28	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			28					
評価者(指導看護師)サイン			大阪					

*自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が『ア』になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：喀痰吸引 鼻腔内吸引(人工呼吸器装着者：口鼻マスクまたは鼻マスクによる非侵襲的人工呼吸療法)

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修				
	回数	月日			(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目	
	時間								
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。ア	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
STEP5 実施	4	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	5	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	6	鼻の周囲、鼻腔内を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	7	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	8	必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセツンを持つ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	9	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	10	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	11	(薬液浸漬法の場合) 吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	12	決められた吸引圧になっていることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	13	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	14	「吸引しますよ～」と声をかける。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	15	口鼻マスクまたは鼻マスクをはずす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	16	吸引カテーテルを陰圧をかけない状態で鼻腔内の奥に入れる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	17	(吸引カテーテルを手で操作する場合) こよりを燃えるように左右に回転し、ゆっくり引き抜きながら吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	18	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	19	口鼻マスクまたは鼻マスクを適切にもとの位置にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	20	(薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	21	保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	22	吸引器のスイッチを切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	23	吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	24	手袋をはずす(手袋着用の場合) またはセツンをもとに戻し、手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	25	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	26	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	27	人工呼吸器が正常に作動していること、口鼻マスクまたは鼻マスクの装着がいつも通りであることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	28	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	29	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	STEP6 結果確認 報告	30	吸引びんの廃液量が70～80%になる前に廃液を捨てる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
		31	洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	STEP7 記録 報告	32	実施記録を書く。ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			32						
評価者(指導看護師)サイン			大阪						

*自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が「ア」になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：喀痰吸引 気管カニューレ内部吸引(通常手順)

研修 受講者氏名	※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。
対象者氏名	

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修			
	回数	月日	(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目
	時間		1月12日	/	/	/	/	/
			15:00~15:30					
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	4	気管カニューレに人工算が付いている場合、はずしておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP5 実施	5	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	6	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	7	気管カニューレの周囲、固定状態及びたんの貯留を示す呼吸音の有無を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	8	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	9	必要に応じきれいな手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	10	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	11	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	12	吸引器のスイッチを入れる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	13	(薬液浸漬法の場合)水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すとともに吸引カテーテルの周囲を洗う。吸引カテーテル先端の水を良く切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	14	決められた吸引圧になっていることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	15	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	16	「吸引しますよ～」と声をかける。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	17	手袋をつけた手(またはセッシ)で吸引カテーテルを気管カニューレ内(約10cm)に入れる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	18	カテーテルを左右に回し、ゆっくり引き抜きながら、15秒以内で吸引をする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	19	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	20	(薬液浸漬法の場合)使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	21	吸引器のスイッチを切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	22	吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合)消毒液の入った保存容器にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	23	(サイドチューブ付き気管カニューレの場合)吸引器の接続管とサイドチューブをつなぎ、吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	24	手袋をはずす(手袋着用の場合)またはセッシをもとに戻し、手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	25	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	26	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	27	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	28	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP6 結果確認 報告	29	吸引びんの廃液量が70~80%になる前に廃液を捨てる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	30	洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP7 記録 報告	31	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			31					
評価者(指導看護師)サイン			大阪					

* 自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が『ア』になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：喀痰吸引 気管カニューレ内部吸引(人工呼吸器装着者：侵襲的人工呼吸療法)

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

A

本票ページ数

/

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習				実地研修				
	回数		(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目	()回目	()回目	()回目	()回目
	月日		1月12日	/	/	/	/	/	/	/	/	/
	時間		15:00~15:30									
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	4	気管カニューレに固定ヒモが結んである場合はほどいておき、少しコネクタをゆるめておいても良い。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
STEP5 実施	5	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	6	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	7	気管カニューレの周囲、固定状態およびたんの貯留を示す呼吸音の有無を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	8	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	9	必要に応じきれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセッシを持つ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	10	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	11	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	12	吸引器のスイッチを入れる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	13	(薬液浸漬法の場合) 吸引カテーテルの周囲、内腔の消毒液を取り除くため、専用の水を吸引し、周囲も洗う。吸引カテーテル先端の水を良く切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	14	決められた吸引圧になっていることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	15	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	16	「吸引しますよ～」と声をかける。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	17	人工呼吸器から空気が送り込まれ、胸が盛り上がるのを確認後、フレキシブルチューブのコネクタを気管カニューレからはずし、フレキシブルチューブをきれいなタオル等の上に置く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	18	手袋をつけた手(またはセッシ)で吸引カテーテルを気管カニューレ内(約10cm)に入れる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	19	カテーテルを左右に回し、ゆっくり引き抜きながら、15秒以内で吸引をする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	20	吸引を終了したら、すぐにコネクタを気管カニューレに接続する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	21	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	22	(薬液浸漬法の場合) 使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	23	吸引器のスイッチを切る。(吸引終了)	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	24	吸引カテーテルを接続管からはずし、破棄する。(薬液浸漬法の場合) 消毒液の入った保存容器にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	25	手袋をはずす(手袋着用の場合)またはセッシをもとに戻す。手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	26	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	27	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	28	人工呼吸器が正常に作動していること、気道内圧、酸素飽和度等をチェックする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	29	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	30	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	STEP6 結果確認 報告	31	吸引びんの廃液量が70~80%になる前に廃液を捨てる。	ア・イ・ウ								
		32	洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	ア・イ・ウ								
	STEP7 記録 報告	33	実施記録を書く。ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ								
	アの個数 計			33								
評価者(指導看護師)サイン			大阪									

*自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が「ア」になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：胃ろう又は腸ろうによる経管栄養(滴下)

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修			
	回数	月日	(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目
	時間		1月12日 15:00~15:30	/	/	/	/	/
STEP4 準備	1	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP5 実施	4	利用者本人から注入の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	5	必要物品、栄養剤を用意する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	6	体位を調整する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	7	注入内容を確認し、クレンメを止めてから栄養剤を注入容器に入れ、注入容器を高いところにかける。滴下筒に半分位満たし滴下が確認できるようにする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	8	クレンメをゆるめ、栄養剤を経管栄養セットのラインの先端まで流し、空気を抜く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	9	胃ろうチューブの破損や抜けがないか、固定の位置を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	10	胃ろうに経管栄養セットをつなぐ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	11	クレンメをゆっくり緩めて滴下する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	12	異常がないか、確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	13	滴下が終了したらクレンメを閉じ、経管栄養セットのラインをはずし、カテーテルチップ型シリンジで胃ろうチューブに白湯を流す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
14	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
STEP6 結果確認 報告	15	後片付けを行う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP7 記録 報告	16	実施記録を書く。ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			16					
評価者(指導看護師)サイン			大阪					

* 自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が『ア』になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が『ア』にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：胃ろう又は腸ろうによる経管栄養(半固形)

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

A

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修			
	回数		(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目
	月日		1月12日	/	/	/	/	/
時間		15:00~15:30						
STEP4 準備	1	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP5 実施	4	利用者本人から注入の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	5	必要物品、栄養剤を用意する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	6	体位を調整する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	7	胃ろうチューブの破損や抜けがないか確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	8	胃ろうに半固形栄養剤のバッグないし、半固形栄養剤を吸ったカテーテルチップ型シリンジをつなぐ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	9	半固形栄養剤のバッグないしカテーテルチップ型シリンジの内筒を適切な圧で押しながら注入する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	10	異常がないか、確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	11	注入が終わったら、チューブ内洗浄程度の白湯あるいは10倍に希釈した食酢をシリンジで流す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	12	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP6 結果確認 報告	13	後片付けを行う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP7 記録 報告	14	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			14					
評価者(指導看護師)サイン			大阪					

* 自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が『ア』になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：経鼻経管栄養

A

研修 受講者氏名	
対象者氏名	

※各対象者の個別性に適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。

本票ページ数	/
--------	---

実施 手順	評価項目		記入例	現場演習	実地研修			
	回数	月日	(1)回目	()回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目
	時間		1月12日 15:00~15:30	/	/	/	/	/
STEP4 準備	1	流水と石けんで手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP5 実施	4	利用者本人から注入の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	5	必要物品、栄養剤を用意する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	6	体位を調整する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	7	注入内容を確認し、クレンメを止めてから栄養剤を注入容器に入れ、注入容器を高いところにかける。滴下筒に半分位満たし滴下が確認できるようにする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	8	クレンメをゆるめ、栄養剤を経管栄養セットのラインの先端まで流し、空気を抜く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	9	チューブの破損や抜けがないか、固定の位置を確認する。口の中でチューブが巻いてないか確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	10	経鼻胃管に経管栄養セットをつなぐ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	11	クレンメをゆっくり緩めて滴下する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	12	異常がないか、確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	13	滴下が終了したらクレンメを閉じ、経管栄養セットのラインをはずし、カテーテルチップ型シリンジで胃ろうチューブに白湯を流す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	14	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP6 結果確認	15	後片付けを行う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
STEP7 記録報告	16	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			16					
評価者(指導看護師)サイン			大阪					

*自由記載欄

()回目	

※【現場演習】は全項目が『ア』になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「ア」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

現場演習・実地研修 評価表：喀痰吸引 口腔内吸引(通常手順)

記入例

研修 受講者氏名	※各対 現場演習: すべての項目が 『A』になるまで 演習をおこなっ てください	適合させるよう、適宜変更・修正してご使用ください。	A
対象者氏名		※票ページ数	

実施 手順	評価項目		現場演習		実地研修				
	回数	記入例	(1)回目	(1)回目	(1)回目	(2)回目	(3)回目	(4)回目	
	月日	1月12日	5月25日	5月25日	5月26日	5月26日	5月26日	/	
	時間	15:00~15:30	9:00~9:05	9:30~9:40	9:30~9:40	17:30~17:40			
STEP4 準備	1	訪問時、第一回目の流水と石けんによる手洗いを済ませておく。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	2	医師・訪問看護の指示を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	3	利用者本人あるいは家族に体調を聞く。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
STEP5 実施	4	利用者本人から吸引の依頼を受ける。あるいは、利用者の意思を確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	5	吸引の環境、利用者の姿勢を整える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	6	口の周囲、口腔内を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	7	流水と石けんด้วย手洗い、あるいは速乾性擦式手指消毒剤で手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	8	必要に応じ、きれいな使い捨て手袋をする。場合によってはセツシを持つ。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	9	吸引カテーテルを不潔にならないように取り出す。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	10	吸引カテーテルを吸引器に連結した接続管につなげる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	11	(薬液浸漬法の場合)吸引器のスイッチを入れ、水を吸って吸引カテーテルの内腔を洗い流すと同時に吸引カテーテルの周囲を洗う。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	12	決められた吸引圧になっていることを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	13	吸引カテーテルの先端の水をよく切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	14	「吸引しますよ～」と声をかける。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	15	吸引カテーテルを口腔内に入れ、両頬の内側、舌の上下周囲を吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	16	一回で吸引しきれなかった場合は、吸引カテーテルの外側をアルコール綿で拭き取った後、洗浄水を吸って内側を洗い流してから、再度吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	17	(薬液浸漬法の場合)使用済み吸引カテーテルは外側をアルコール綿で拭き取った後、水を吸って内側を洗い流してから、保存容器の消毒液を吸引カテーテル内に吸引する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	18	吸引器のスイッチを切る。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア	ア・イ・ウ	
	19	吸引カテーテルを連結管からはずし、破棄する。 (薬液浸漬法の場合)消毒液の入った保存容器にもどす。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア	ア・イ・ウ	
	20	手袋をはずす(手袋着用の場合)またはセツシをもとに戻し、手洗いをする。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア	ア・イ・ウ	
	21	利用者に吸引が終わったことを告げ、確認できる場合、たんがとれたかを確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	22	利用者の顔色、呼吸状態等を観察する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	23	体位を整える	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	24	吸引した物の量、性状等について、ふり返し確認する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	
	STEP6 結果確認 報告	25	吸引びんの廃液量が70~80%になる前に廃液を捨てる。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
		26	洗浄用の水や保存容器の消毒液の残りが少なければ取り換える。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
	STEP7 記録 報告	27	実施記録を書く。 ヒヤリ・ハットがあれば、業務の後に記録する。	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ	ア・イ・ウ
アの個数 計			27	25	23	25	25		
評価者(指導看護師)サイン			大阪	介護	介護	赤出	赤出		

* 自由記載欄

(1)回目	実地研修: 2項目が『ウ』のため、 連続して2回以上 『ア』になるまで実地 研修をおこなってくだ さい	実地研修: 指導講師の サイン又は印を 押してください
()回目		
()回目		
()回目		

実地研修:
それぞれに利用者様ご
とに必要な研修をおこな
ってください
※該当なしの項目は斜
線で消すなど適宜修正し
てください

実地研修:
『ア』の合計数を記入ください

※【現場演習】は全項目が『A』になるまで、一連の流れを確認してください

※【実地研修】は2回連続で、全項目が「A」にならないと修了となりませんので、ご注意ください。

実地研修報告書

受講者名	
------	--

※複数利用者がおられる場合はコピーしてください。

対象者名		
実施年月日	年 月 日	～ 年 月 日
実施時間	時 分	～ 時 分
この対象者に対して今回 実地研修を終了した特定 行為の種類 ※特定行為欄に○をしてくだ さい。	<input type="checkbox"/>	口腔内の喀痰吸引(通常手順)
	<input type="checkbox"/>	口腔内の喀痰吸引(非侵襲的人工呼吸器装着状態)
	<input type="checkbox"/>	鼻腔内の喀痰吸引(通常手順)
	<input type="checkbox"/>	鼻腔内の喀痰吸引(非侵襲的人工呼吸器装着状態)
	<input type="checkbox"/>	気管カニューレ内部の喀痰吸引(通常手順)
	<input type="checkbox"/>	気管カニューレ内部の喀痰吸引(侵襲的人工呼吸器装着状態)
	<input type="checkbox"/>	胃ろう又は腸ろうによる経管栄養(滴下)
	<input type="checkbox"/>	胃ろう又は腸ろうによる経管栄養(半固形)
	<input type="checkbox"/>	経鼻経管栄養

上記の「実地研修」に関して、修了したことを報告いたします。

事業所住所 〒

事業所名

指導看護師名

印

チェック☑ ※ご確認ください！！※

実地研修評価表 A	<input type="checkbox"/>	・現場演習の評価はありますか？ ・開始時間・指導看護師のサインはありますか？ ・2回連続で『A』の評価ができていますか？
実地研修報告書 B	<input type="checkbox"/>	・実施年月日、実施時間、特定の行為に記入漏れはありませんか？ ・指導看護師又は法人の印は押印されていますか？
実施機関承諾書 C	<input type="checkbox"/>	・受入開始時期等、記入漏れはありませんか？ ・法人印は押印されていますか？

連絡先: 〒558-0011 大阪市住吉区苅田9丁目14-20ヤヨイビル206号

株式会社ベストケア・パートナーズ 介護キャリアアカデミー 吸引等研修係

TEL 06-6147-9567

FAX 06-6606-8731

確認者1	確認者2

(別紙5)

喀痰吸引等研修 実地研修 実施機関承諾書

令和 年 月 日

介護キャリアアカデミー 殿

設 置 者

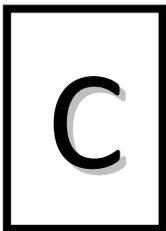
所 在 地

代 表 者 名

㊦

下記は、介護キャリアアカデミー（登録研修機関）が実施する喀痰吸引等研修において、実地研修として研修受講者を受け入れることを承諾いたします。

施設種別及び施設名	
設置年月日	
代表者名	
法人名	
電話番号	
研修受講者責任者名	
研修受講者受入開始時期	
研修受講者受入人数	



喀痰吸引等研修 実地研修 実施機関承諾書

令和 年 月 日

介護キャリアアカデミー 殿

設置者 (下記④の法人名を記入下さい)

所在地 (下記④の住所を記入下さい)

代表者名 (下記④の代表者名を記入下さい) 印

下記は、介護キャリアアカデミー（登録研修機関）が実施する喀痰吸引等研修において、実地研修として研修受講者を受け入れることを承諾いたします。

施設種別及び施設名	① □×△訪問看護ステーション安心の森
設置年月日	② 上記①の設立年月日を記入下さい
代表者名	③ 上記①の代表者名を記入下さい
法人名	④ ①の所属する法人名を記入下さい ①と④が同一の場合もごさい ます 例：医療法人 □×△安心グループ
電話番号	⑤ 上記④の電話番号を記入下さい
研修受講者責任者名	⑥ 受講者の氏名を記入下さい (複数の場合は代表者の氏名を記入下さい)
研修受講者受入開始時期	⑦ 研修実施日を記入下さい
研修受講者受入人数	⑧ 実地研修受講者の総人数を記入下さい